

招待席

国木田 獨歩

くにきだ どっぽ 小説家 1871.7.15(新暦 8.30)-1908.6.23
現千葉県銚子に生まれる。我が国自然主義文学に先駆け、
且つ理想をはらみ抒情性に富んだ短編作家として知られ
た。没年彼が療養費支弁の目的で友情出版された、長谷川
二葉亭、島崎藤村、徳田秋声、正宗白鳥ら『二十八人集』
の連名が当時獨歩の重みを証言して余りある。掲載作は
明治四十年(1907)一月に書かれている。すでに健康大いに
衰えかけていた。

我は如何にして小説家となりしか

自分が小説家であるか、無いかゞ先づ第一の問題です、世間が自分を小説家
であると、定(き)めて居るなら其(それ)も致し方がありません、喧嘩にも成り
ません、元来自分は小説を書いて其で一身を立(たて)やうなどとは、少年の時
も青年の時代も夢にも思つた事が無いので、其で小説家と若(も)し世間がみと
めて居るなら、其は自分が取るにもたらぬ、三ツ四ツの短い物語りを書いた結
果でありまじやう其ならば自分に対する問題の適切なる意義は、「我は如何(い
か)にして二三の小説を書きしや」と、言ふ事に成るだらうと思ひます、そう
です「家(か)」であるか、「家」で無いかは問題の外(ほか)と致しまして、兎
も角も「如何にして二三の物語りを書きしか、而(しか)して、世間から小説家
であるとみとめらるゝ男と成りしか、」といふ問で答(こたへ)る事に致しまし
やう。

全体自分は、功名心が猛烈な少年で在りまして、少年の時は賢相名将とも成
り、名を千歳(せんざい)に残すといふのが一心で、ナポレオン、豊太閤(ほう
たいかう)の如き大人物が自分より以前の世にあつて、後世を圧倒し我々を眼
下に見て居るのが、残念でたまらないので半夜(はんや)密かに、如何にして我
れは世界第一の大人(たいじん)と成るべきやと言ふ問題に触着(ぶつか)つてぼ
ろぼろ涙をこぼした事さへ有るのです、けれども今から思ふと世間の少年は十
の八九、皆かくの如き取り止(とめ)のない、馬鹿馬鹿しい、比較根性から出た

妄想で、つまりは、坊の蜜柑(みかん)の方が小さいとか、大きいとか言つて泣いたり、わめいたりする動物体(てい)の発作に、過(すぎ)ないのでありましようが何んでも彼(かん)でも兎も角も、其の発作で心を動かして居たのですから、物語を作つて一生を送るなど言ふ、事は夢にも思はず、思はないばかりではなく寧(むし)ろ男子の恥辱と迄、思つただらうと思ひます(實際、其処まで思つたか思はないかすら、記憶にないのです)、つまり文章家、小説家など言ふものは、絶対に眼中に無かつたのです、処が、自分の精神上に一大革命が起りました、即ち、人性(じんせい)の問題に触及(ぶつかつ)たので有ります、謂(いは)ゆる「我は何処(いづこ)より来りし、」「我は何処に行く」「我とは何んぞや、(What am I?)」との問題に触(ふれ)たので有ります、其(それ)で如何にしてかゝる問題に触たかと言ふ事は、此処で申上る場合では有りませんから止しますが、何しろ結果は則ち精神上の大革命でありまして、今迄の大望(たいまう)が、がらり破れて仕舞(しまつ)たのです、ナポレオンも、秀吉もいつかう、豪(えら)く無くなつて、了つたので有ります、若(もし)豪いならば其豪いと言ふ意義がまるで違つて来て比較根性から出た意義、功名、利達、の意義に成つて仕舞たので有ります。

当然自分の对手(あひて)が以前と全(まる)で異つて来ました。以前は自分と世間とが常に相對して居たのが、今度は自分と此人生、自分と此自然とが相對して来て、自分の心は全たく其方(かた)に取られて了ひました。そこで読む書(もの)が以前とは異(ちが)つて来る、以前は憲法論を読み經濟書を読み、グラツドストンの演説集を読み、マコーレーの英国史を読んだ自分は、知らず知らず此等を捨て、カーライルのサルトルレザルタスを読み、ラーズラーズの詩集にあこがれ、ゲーテをのぞき見するといふ始末に立到りました。斯(か)うなると、自分は哲学と宗教との縁を離るゝ事が出来なくなり、基督教にて示されし宇宙觀、人生觀などが寝ても覺めても自分を或は悩まし或は慰め、それに心を奪はれて實際の事は殆ど手にもつかぬ場合もありましたし、自然、自分は宗教家にならうかと思つた事もありました。

斯ういふ境遇に陥つた青年は当時、自分ばかりでなく、外に幾人(いくら)もあります自分の友達の中(うち)にもあります、そして終極(たうとう)皆(みんな)如何(どう)なつたかと申ますと、遂に宗教家になつたものもあり、語学か倫理の教師になつたものもあり、そして文章を書くのが本職になつたものもあり、先づ此の三類(みとほり)の一に大概是落着て了つたのです。或は未だ何(いづ)れにも落着ないものもあります。そして自分は文章に縁多き方(かた)に来て了つたのです。又た教師を為(し)た事もあります。要之(つまり)、煩悶ばかりして居る訳に行かなくなり、パンを口に入れる道を急ぐ場合となれば、先づ其時分の自分の如き種類の青年は、教師にでもなるか、宗教家を本職とする外には使ひ道

がないのであります。

処が哲学とか宗教とかを、ひねくつて居ると、自然文藝に縁が付いて来るもので、カーライルの如きも同じ道行(みちゆき)で終(つひ)に文学者になつて了(しま)したから、自分も我知らず何時(いつ)の間にか、書いて見るやうになつて、従てそれが、身を助ける藝になり、パンを得る唯一の手段となつて了(しま)つたのです。

親父(おやぢ)の脛を嘔りながら二十一、二歳まで東京で煩悶(ぼんもん)を行(や)つて居ましたが、それも出来なくなりまして遂に矢野竜溪先生の推薦で先生の郷里、豊後(ぶんご)の佐伯(さいき)で英語の教師をやつて一年計(ばか)り居ました。此(こ)静閑(しやうかん)なる一年間に自分は全く自然の愛好者となり、崇拜者となり、マーズローズ信者となり、明けても暮ても溪流、山岳、村落、漁村を遍(へめ)ぐり歩き、溪(たに)を横(よこ)ぎる雲(うみ)に想(おもひ)を馳(は)せ、森(もり)に響(こ)く小鳥(こどり)の声(こゑ)に心を奪(さら)はれ、そして同時に、『牛肉(ぎゅうにく)と馬鈴薯(じゃがいも)』(自分の書いた小説)の主人公、岡本誠夫(をかもとせいふ)の煩悶(ぼんもん)と同じ煩悶(ぼんもん)を続けて居ましたので、其(その)当時(たうじ)です、徳富蘇峯(とくふそほう)先生(せんせい)に書状(てがみ)を出(だ)して自分は最早(もはや)、政治(せいざ)には少しも趣味(きうみ)を有(も)たなくなつたと言(い)ひ送(おく)りましたら、先生(せんせい)から教訓(きょうくん)の意味(いみ)の返事(へんじ)が来(き)た事(こと)がありました、實際(じつじ)に、それほどまでに自分の心が現代(げんたい)の問題(もんだい)から離(はな)れて了(しま)つたのです。そこで一年(いちねん)ばかり教師(きょうし)を為(な)して居(い)る中(うち)に、生(な)れついた鬱勃(うつぼつ)の念(ねん)が抑(おさ)へきれず、遂(つい)に又(また)東京(とうきやう)に飛(と)出て来(き)て、入(い)社(しゃ)したでもなく、只(ただ)蘇峯(そほう)先生(せんせい)の愛顧(あいこ)に附(つ)込んで民友社(みんゆうしゃ)にもぐずり込み(こ)ました、(もぐずり込む(こ)むと言(い)へば変(へん)ですが、当時(たうじ)の民友社(みんゆうしゃ)の同人(どうじん)は大概(たいてい)もぐずり込み(こ)んだので、今日(こんにち)唯(ただ)今(いま)より入(い)社(しゃ)、月給(げつぎやう)は幾干(いくざん)といふ(い)ふ手続(ていじ)きは無(な)いやうでした)、民友社(みんゆうしゃ)といへば、当時(たうじ)文藝(ぶんぎ)の本場(ほんば)で、『国民之友(こくみんしゆう)』は文壇(ぶんだん)の最高位(さいこうゐ)を占(お)めて居(い)たといつても宜(よろ)しい位(ゐ)、その社(しゃ)へ自分(じぶん)が入(い)つたのが則(すなは)ち自分(じぶん)と文藝(ぶんぎ)との縁(ゆかり)を確(た)実に結(ゆ)ひつけた源因(げんゐん)です。その後(のち)の自分(じぶん)の経歴(けいれき)は随分(ずいぶん)波瀾(はらん)がありました、つまり、『国民之友(こくみんしゆう)』といふ当時(たうじ)文壇(ぶんだん)第一(だいいち)の雑誌(ざっし)に随(ずい)意(い)に書(か)けるといふ特別(とくべつ)の事情(じやうけい)で、自然筆(じぜんひつ)も達者(たつた)になる、則(すなは)ち藝(ぎ)が上達(じやうたつ)する、従(したが)つて面白味(おもしろみ)も出(で)て来(き)る、遂(つい)には此(こ)藝(ぎ)の外(ほか)、何(なに)一つ飯(い)を喰(く)ふ藝(ぎ)がなくなつて、従(したが)つて喰(く)へなくなると直(ただ)ぐ此(こ)藝(ぎ)を出(だ)して来(き)ました。

誤解(ごかい)されては困(こ)ります。自分は今日(こんにち)まで衣食(いじふ)を得(え)る方法(はうほう)として文章(ぶんじやう)を書(か)いたといふ丈(だけ)の事(こと)で、則(すなは)ち自分(じぶん)の實際(じつじ)を申(ま)上げたので、『文藝(ぶんぎ)は衣食(いじふ)を得(え)る藝(ぎ)当(あた)りに過(か)ぎず』などとは夢(ゆめ)にも思(おも)ひませ(な)せん。文藝(ぶんぎ)それ自身(それみづか)の目的(もくひく)の高尙(こうじやう)なる事(こと)は承(おぼ)知(ち)して居(い)ます。又(また)自分(じぶん)の作物(さくぶつ)は自分(じぶん)が心真(こゝろまこと)に感(か)得(とく)し得(とく)たるを正(ただ)直(ぢ)に書(か)いたもので、それが文藝(ぶんぎ)の光輝(こうき)を幾分(いくぶん)か発揮(はつゐ)し得(とく)て居(い)るといふ自信(じゆん)及び満足(まんじつ)も持(も)つて居(い)ます。

何卒(どうか)自分(じぶん)も今後(こんご)益々(ますます)奮(ふる)つて我(われ)が製作(せいさく)を世(よ)に出(だ)さうと思(おも)つて居(い)ます。

若(も)し自分が小説家ならば、今後益々小説家の本分を尽さうと思つて居ます。

たゞ自分は、人生問題に煩悶した当時の我から全く離れて、たゞ文藝の為に文藝に埋(うづも)れ度(た)くありません『人生の研究の結果の報告』といふ覚悟は何処(どこ)までも持て居たいのです。

政治ですか。そうです、今は政治も何もかも、皆な面白くなりました。何にでも多少の興味を持ち得るやうになりました。

(明治四十年一月)